



|              |                                                                               |
|--------------|-------------------------------------------------------------------------------|
| Title        | 考古学と椀貸伝説 : 郷土史という視点からの伝承とモノ                                                   |
| Author(s)    | 角南, 聡一郎                                                                       |
| Citation     | 待兼山考古学論集. 2025, 4, p. 775-784                                                 |
| Version Type | VoR                                                                           |
| URL          | <a href="https://doi.org/10.18910/105088">https://doi.org/10.18910/105088</a> |
| rights       |                                                                               |
| Note         |                                                                               |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 考古学と椀貸伝説

## —郷土史という視点からの伝承とモノ—

角 南 聡一郎

### はじめに

椀貸伝説とよばれる伝承がある。椀貸伝説はこれまで主に、民俗学の研究対象として検討がなされてきた。しかしながら、後述するようにこの伝承と考古資料、特に古墳とは不可分な関係にある。主に開口した横穴式石室でこの伝承が語られる場合、古墳は椀貸塚と呼ばれることがある。この名はそのまま古墳名称となっている事例も散見される。当然ながら考古学ではこれらは古墳として調査研究されることになる。地域に所在する存在としては、古墳は築造された後もそこに在り続ける。そして多くは塚として認識され、おそらく多くの塚には伝承が寄り付いて一体化しただろう。伝承が失われたものもあるが、現在までそれが維持されて来たものもある。これらは地域資料としては、考古学研究の対象としての古墳だけでなく、伝承の場としての古墳という側面も持つことになる。考古資料は考古学で、伝承資料は民俗学でというように、取り扱う学問分野が異なっている状況にある。地域研究をする上では、理想的にはこれらが総合されて資料が評価されることが望ましい。また、そういった形の方が地域住民にとってもわかりやすく、文化資源としても活用しやすいだろう。

そこで本稿では、主として民俗学的に検証され論じられてきた椀貸伝説を、民俗学的成果・情報もふまえつつ、考古学的な立場による記述を総合して、再検討を試みてみたい。

具体的には、柳田国男をはじめとした学説上論拠となった文献の、出典を明らかにすることである。戦前のアカデミズムにあって、現在のように出典明記の厳格なルールがあったわけではないため、典拠の記載についてはまちまちである。しかしながら、『古事類苑』の編纂にみられるように、出典を明らかにすることは自明のこととされていたし、それが前近代からの伝統でもあった。学術的に検証をおこなうためには、原典を確認しておくことが必要であろう。安易に現代的感覚から、原典が明示されていないことを批判し、否定的にとらえることもできないだろう。それは、前近代の書誌情報が継承されごく一般的教養であり、ことさら明記するほどのこともなかったような時代としての、時代性や環境の問題も考慮しなければならないだろう。

## 1. 民俗学の対象としての椀貸伝説

民俗学では椀貸伝説がどのように認識され研究されてきたのだろう。『日本民俗大辞典』には「椀貸伝説」として項目が立ち、「伝説の一つ。椀貸滝・椀貸塚・椀貸淵・椀貸山などとする。椀や膳が入用の時、依頼に応じてくれるという話」とある（野村 2000）。

他方、考古学者・斎藤忠（1908～2013）の『日本考古学用語辞典』では、「椀貸伝説」の項目が立てられ古墳との関連として紹介されている（斎藤 1992：pp. 465-466）。斎藤があえて考古学辞典にこの項目を入れたのは、学説史研究上の意義と、斎藤が当初は民俗学に関心を持ち柳田国男に師事していたことによるものと考えられる。

椀貸伝説に学術的に言及し、伝説の類型として位置付けたのは柳田国男である。柳田は1910年に『太陽』に掲載された「伝説の系統及分類」で椀貸伝説の類をあげている（柳田 1910）。そして椀貸伝説は隠れ里伝説と関連していると述べた。椀貸伝説は後に柳田による「隠里の話」で再度言及される（柳田 1934b）<sup>(1)</sup>。当初は、椀貸の場所は山中または水辺の岩穴の前であるとしている（柳田 1910）。また『日本文学大辞典』では椀貸伝説は「椀貸穴」として紹介している（柳田 1934a）。「隠里の話」では香川県観音寺市椀貸塚古墳などの椀貸伝説などを紹介し、この伝説と古墳が関係の深いことを示している（柳田 1934b）。しかし、柳田は、古墳との関係はあるものの、その他の場所との関係が強いことを強調する。柳田の影響は計り知れないものがある。以降の研究では、後述する北見俊夫（1924～1995）の研究以外は、考古学的な知見と合わせた椀貸伝説と古墳との関係について民俗学サイドからの検証は、ほとんどなされていないといっても過言ではない。それが意図的であったかどうかの検討を要する。

「隠里の話」では事例の出典が明示されているものと、そうでないものがある。そこで本稿では、可能な限り原典にあたることにより、柳田がそれらをどのように整理したかを明らかにしたい。そのような作業をおこなうことにより、柳田の椀貸伝説の定義についての意図が見えてくるのではなかろうか。

椀貸伝説の検証過程において、近世の地誌類をもとにしながらも、柳田の独自の解釈により、古墳に関する情報は淘汰されてしまった感がある。この過程で考古学が対象とする資料と伝承との乖離がみられる。それは、歴史学とは別に日本民俗学の確立を目指す柳田にとっては、必然的な選択であったのかもしれない。

北見俊夫によれば、椀貸伝説は全国で150近くあり、地域的には中部地方が大半で、立地として古墳・塚に関するものは関東に2例、中部に23例、西南日本に11例で合計36例である。立地で水に関係したものは中部地方に多く、西南日本では少ない。これに対して、古墳・塚、岩穴に関しては、逆に西南日本がその割合において多いという傾向を示した。北見の結論も柳

田の意向に沿ったものであった。

## 2. 先行研究と出典の検証

柳田の提唱した枕貸伝説は、しばらくして鳥居龍蔵（1870～1953）により批判的に言及される。それは1917年4月8日に東京帝国大学山上御殿で開催された、東亜協会部会日本学会の例会での講演を成文化したものである。鳥居は「実際の事でなく、心理的に伝説学上の材料として取扱ふだけのものであるか、将たエスノグラフィーの上に於て実際人間の生活上の風習として取扱ふ可きものか、是れが問題なのです」として文献史料やアイヌとコロボックルの交易の伝説をあげ、枕貸伝説は「無言貿易」の一種であると位置づけた（鳥居1917）。

鳥居以前に、枕貸伝説と沈黙交易との関係を指摘したのは南方熊楠（1867～1941）である。南方は、『郷土研究』1巻3号に掲載された「枕貸穴」（飯田1913）に対するコメントとして（南方1913：pp. 41）、アイルランドの歴史学者・カイトリー（Thomas Keightley, 1789～1872）の著作『The Fairy Mythology』（Keightley 1828）をあげ枕貸伝説の類例がドイツのダルデスハイム（Dardesheim）近くのスマンスボルン（Smansborn [Leßmannsborn]）泉が出る小山や、イングランド・サリー州（Surrey）のフレンシャムの教会（Frensham church）近くのボローの丘（Borough hill）にある洞窟の事例をあげた。また明の謝肇淛（1567～1624）が撰した『五雜俎』（1619年成立）の、「鬼（亡者）の市」を紹介した（謝1997）。英語では「黙商（サイレント・トレード Silent Trade）」と呼ぶこと、グリアソン（Philip James Hamilton-Grierson, 1851～1927）の『沈黙交易』の提示をおこなっている。

徳島県の考古学者・笠井新也（1884～1956）が『考古学雑誌』に投稿した「阿波考古雑記」の中で、「家具を貸した塚穴」として「阿波では少し大きい塚穴には、皆昔家具を貸したといふ伝説が付けられてゐる」と述べている（笠井1910：p. 49）。『太陽』16巻16号は12月の刊行、『考古学雑誌』1巻3号は11月の刊行である。日付的には笠井の方が先であるが、ほぼ同時のタイミングであると考えられる。笠井は翌年に「家具の岩屋」という話を『阿波伝説物語』（笠井1911：p. 24）に収めている。

また、金沢市出身の民俗学者／人類学者・出口米吉（1871～1937）は、『人類学雑誌』29巻3号の「土俗覚帳（二）」で、「三十九 枕貸伝説」として、近世地誌などの事例を取り上げている（出口1914）。丸山太郎（瓦全、1874～1951）は「古墳の名称」の中で、古墳名称を類型化し、「（七）口碑伝説に依り命名せしもの」のうち「（3）長者伝説に依り命名せしもの」として「坂井郡坪江村」の「ワンカシ山」を例示した（丸山1916）。これらは柳田の「隠里の話」（1918）に先んじていることから、枕貸伝説研究の研究史上で重要な文献である。

柳田が引用し言及している、地誌情報の追跡や特定も必要であろう<sup>(2)</sup>。伝承から破壊消失し

た古墳の復原を試みるのが、可能ではなかろうか。また古墳、遺跡のその後の調査研究の動向も加えて検討する必要がある。以下、「隠れ里の話」にある事例を検討する。

**福井県梶賀山（福井県坂井市丸岡町坪江）**（柳田 1934b : p. 220）

『若越小誌』に「ワンカシ山は坪江村瓜生にある瓢形古墳にして、長さ二十五間・幅十二間乃至十六間・高さ四間半に達し、円筒埴輪の破片を残存す。土民之を梶子皇子の墳と称せり」（中谷・野田編 1909 : p. 646）。梶賀山古墳を調査した福井県出身の考古学者・上田三平（1881～1950）は、この古墳に梶賀伝説が伝わることを記している（上田編 1920）。

**「下久米田の黍塚」（福井県坂井市丸岡町下久米田）**（柳田 1934b : p. 220）

『越前国名蹟考』中、下久米田村の項に「黍塚 隠レ里」として梶賀伝説が示されている（井上編 1903 : p. 923）。『越前国名蹟考』は福井藩の国学者・井上翼章（1753～1820）の編によるもので、文化 12 年（1815）成立した。また、『鳴鹿村誌』には「丸山」「今は小さくなつたが、昭和の初頃までは大きな山であつた。三体の石地藏があり立木が生い茂つて、よく木の根に乞食がねていた。昔はこのあたりに追剥が出没するといつて夜間はめつたに人通りもなかつたという。昭和四年、永鉄をつける時に丸山を崩して電車道に運んだ」とある（伊東編 1952 : pp. 320-321）。

以上の記録から丸山（黍塚）が存在した時代のこと、消滅の要因を知ることができる。丸岡町坪江から下久米田までは 9 km 以上離れており、二つの事例が別のものであることは明らかであろう。

**「吉城郡国府村大字広瀬町の亀塚一名梶塚」（岐阜県高山市国府町広瀬町）**（柳田 1934b : p. 222）

岐阜県の郷土史家・岡村利平（1864～1933）は、飛騨の江間氏親著『行囊抄』のうち『越遊行囊抄』に（元禄 9 年（1696）成立）に、この塚には鎧賀伝説があつたことを引用し指摘している（岡村 1909 : p. 59）。つまり、出典は明記されていないものの、柳田が参照・引用したのは『越遊行囊抄』<sup>(3)</sup>であつたことがわかる。亀塚は高山市国府町の亀塚古墳のことである。5 世紀の円墳であつたが、破壊され現在は失われている。同古墳出土の甲冑、武器類は高山市指定文化財となっている。

**「上伊那郡松島村の龍宮塚」（長野県上伊那郡箕輪町中箕輪）**（柳田 1934b : p. 222）

「龍宮塚」については『伊那志略』巻之三がその部分である（長野県上伊那郡教育会編 1975）。儒学者・中村元恒（1778～1851）の『伊那志略』は文化 9 年（1812）成立による地誌である。

松島王墓古墳は 5 世紀末～6 世紀代に築造された全長約 58 m の前方後円墳である（柴 1986）。松島王墓古墳には、現在陪塚が 1 基認められる。かつてこの付近には、龍宮塚と呼ばれる古墳があつたという伝承があること等から、かつては複数の古墳からなる古墳群であつたと考えられる（箕輪町郷土博物館編 2013 : p. 14）。

「射水郡水戸田村大字市井の甲塚」（富山県射水市市井字屋敷田）（柳田 1934b : p. 222）

農学者・宮永正運（1732～1803）の天明6年（1786）成立の地誌『越之下草』に、「甲塚のかくれ里 東条郷市井村にあり」（宮永 1951 : p. 96）と記載されているものが相当する。

旧大門町市ノ井の市ノ井大塚古墳は、富山県の教員・大村正之（1885～？）（橋本 2009 : p. 36）が現地調査をした際に、「所謂膳貸伝説なるものがある」と記している（大村 1940 : p. 4）。本古墳は5世紀末から6世紀と考えられる直径36.5 m、高さ約6 mの規模を持つ円墳である（大門町教育委員会編 1981）。1965年に県指定の史跡となっている。

「阿波郡西林村の箭塚」（徳島県阿波市阿波町西林）（柳田 1934b : p. 222）

『阿波誌』には「矢塚 亦西林村に在り形骸の如し因て名づく」とある（佐野 1932 : p. 262）。『阿波誌』は阿波藩の儒学者・佐野之憲が文化12年（1815）にまとめたものである。同様の記述は『粟の落穂』にもある。同書は弘化3年（1846）成立、著者は国学者・野口年長（1780～1858）である。柳田が「例へば阿州などでは、少し大きな塚穴には皆この種の傳説があると云ふ人も有る位で」（柳田 1934b : p. 223）と批判したのは、野口の記述であると考えられる（野口 1939 : pp. 77-79）。

「美馬郡郡里村の双塚」（徳島県美馬市美馬町字坊僧）（柳田 1934b : p. 222）

笠井新也によって「段の塚」、「徳島県下美馬郡郡里村字宗重の段と呼ばれる一小台地に在る古墳で、そこには甲乙の二古墳が東西に相並んで在る」（笠井 1922 : p. 132）とされた古墳をさす。「段の塚穴」とは太鼓塚古墳と棚塚古墳、東西2基の円墳の総称である。いずれも古墳時代後期のもので、横穴式石室は段の塚穴型石室である。1942年に国指定史跡となった。

「麻植郡森藤村の塚穴」（徳島県吉野川市鴨島町森藤）（柳田 1934b : p. 223）

当地に古墳は知られないが、かつて古墳が存在したという記録はある。『麻植郡誌』には「森山村森藤字壇 円墳数箇所 全て破壊し去り痕跡もない」（麻植郡教育会編 1922 : p. 152）とある。『鴨島町誌』には、これらの地について、編者の一人平島正が、1962年に現地で踏査をしたところによると、開墾されて田畑となっているものの、四囲の状況から判断して古墳の跡であることは疑いなかったという（鴨島町教育委員会 1964 : p. 145）。

「那賀郡日開野村」（阿南市日開野町王子山）（柳田 1934b : p. 223）

『富岡町志』には「日開野村字王子山なる一小孤山王子山には奥行三四間許の岩屋があつて土人は之を家具の岩屋と称して居る」（田所・天羽編 1925 : p. 125）とある。同所所在、古墳時代後期の円墳3基からなる王子山古墳群がこれに相当するものと考えられる。

「岩子山の麓の洞穴」（愛媛県松山市北斎院町）（柳田 1934b : p. 238）

国文学者・五十嵐力（1874～1947）による『趣味の伝説』に収められた説話伝承のうち、「岩子の洞」（五十嵐 1913 : pp. 319-320）とあるのが、柳田が記している「岩子山の麓の洞穴」の事例である。『松山史要』の岩子山城の項には、「一名を大空城と云ふは洞穴あるによりてなり」

とされる（西園寺編 1927:p. 13）。柳田と愛媛県の郷土史家・西園寺源透（さいおんじげんとう、号富水）（1864～1947）は「洞穴」としているが、同じく郷土史家・長山源雄（ながやまもと お、号乾城）（1886～1951）は「塚穴」と表記している。

愛媛県の考古学者・西田栄（1909～1997）は、松山市では大正時代に古墳の発掘に伴い、「金鶏夜鳴き伝説や貸椀伝説」が流布し、発掘半ばで温存された北斎院岩子山洞穴の城山への抜け道話を残したという（西田 1980 : p. 506）。それ以前にも西田は、愛媛県下では大正時代に「金鶏夜鳴伝や貸椀伝説を伴い発掘半ば温存された古墳」があったことを指摘している（西田 1968 : p. 23）。

### 3. 愛媛県における椀貸伝説と古墳

各地に椀貸伝承は伝わるが、ここでは遺跡との関連について、これまで多く言及されてきたと考えられる、愛媛県について詳細をみてみたい。

『愛媛県史民俗下』で愛媛県の民俗学者・秋田忠俊（1924～1993）が次のように述べている（秋田 1984 : pp. 578-580）。西園寺源透編著の『伊予奇談伝説』25巻が愛媛県立図書館に収蔵されている。8～11巻は欠本で所蔵巻数は21巻である。近世地誌のほか、新聞雑誌・書簡・談話などのなかから、奇談・伝説を抜き出して編集しており、1921年2月から1935年10月の14年間にかけての収集資料である。「伊予奇談伝説」総目次一覧が「伊予の民俗 29号」に示されている（無記名 1979）。これには椀貸伝説に関するものが多数ある。

高校教員で郷土史家・渡部盛義は周桑郡内の椀貸伝説7例を紹介し、これらは古墳の残欠であると考えた（渡部 1930 : p. 31）。これを受けて西園寺源透（予水老漁）は、渡部の紹介について、「余の研究上頗る利益を得た事を感謝する次第である。余が是迄調べてをる椀貸伝説地は県下では約三十ヶ所もあるが、其中三ヶ処を除くの外は皆古墳である。古墳には椀貸伝説が附物と云ふてもよい位である」（予水 1930 : p. 101）と付言した。

長山源雄は『伊予史談』誌上に、愛媛県伊予郡、越智郡、温泉郡、周桑郡、新居郡の椀貸伝説14例を紹介した（長山 1938）。これらすべてが古墳もしくは古墳跡と考えられるものである。愛媛県の民俗学者・森正史（1923～2017）は、愛媛県の椀貸伝説はほとんど古墳について語られるという特色があるとしている（森 1961 : p. 110）。

### 4. 文献にみる長山と柳田、鳥居との関係

西田栄によると、西園寺源透と長山源雄は大正時代に『伊予史談』、『考古学雑誌』、『人類学雑誌』への寄稿を通じて、愛媛県の考古学を牽引した存在であったという（西田 1992）。他方、

両者は民俗学界でも活躍した。柳田の逝去に際して、森正史は柳田と愛媛県の民俗学との関係を回顧している。その関係は1908年に遡り、1925年には伊予史談会に招かれて講演をしていることなど、浅からぬ交流があった（森1963）。西園寺は、『民間伝承』などに寄稿し、柳田の古稀記念文集にも執筆している（西園寺1947）。また、長山は古くから『郷土研究』に投稿をしている（長山1914）。

國學院大学方言研究会編の『風位考資料』に収められた柳田の「風位考」（柳田1935）は、前述のごとく当初「風位考資料」の名で1930年『愛媛縣周桑郡郷土研究彙報』2号・3号・5号、1931年同誌8号・11号に掲載されたものである。『愛媛縣周桑郡郷土研究彙報』は、高校教員で方言学者・杉山正世（1889～1979）が主宰した愛媛県立周桑高等女学校内郷土研究会より1930～1932年の間、1～18号まで1年半にわたって刊行された。

1933～1937年の間に刊行された柳田の著作の中で、たびたび長山が登場する（柳田1933a・b・1934b、柳田・大間知1937）。一方、長山の方でも同時期の記述に柳田が現れる。『南宇和郡史』で南予の闘牛について述べる中で、柳田の牛相撲の起源について柳田の『郷土生活の研究法』（柳田1935）を引用している（長山1938：p.480）。

『南宇和郡史』に「其後昭和二年八月に鳥居博士を東道して再び発掘調査をした」（長山1938：p.4）とある。これは、1927年8月10日に長山が鳥居を案内し平城貝塚を調査したことをさす（湯浅2022）。同じく長山は『南予史研究（稿本）』の序文で指導を受けた人物として、鳥居、柳田、助言と示教を得た人として西園寺を挙げている（長山1934）。

長山は「豊後国直入地方の民間伝承」で「民間伝承は亡びつゝあるのである。茲に私が禿筆を訶したのもこれを採録して、後世に伝えたいと思ふのに他ならない」と述べている（長山1929：p.41）。長山は大分県直入地方で民俗調査と共に、考古学的調査や石造物調査も実施している（長山1920など）。長山は予てから関係があった国東半島の開墾地に入り、同地方の調査を実施したという（西田1992：p.5）。伝承・遺跡・遺物にとらわれず、消失するものへの郷愁・それを守らねばならないとの、長山の使命感が看取される。

## おわりに

本稿では、柳田の枕貸伝説に関する文献を中心に、その典拠を探ってみた。その結果、柳田による解釈や古墳や考古学を、どのように捉えていたかが垣間見られたと考える。古い文献で原典が明示されていないものは、まずは典拠を検証することが学説史上でも非常に重要であるといえよう。つまり、このような検証がなされない場合は、定説として典拠が不明瞭なまま、あるいは誤った解釈が広く周知され、学術的に好ましくない状況が継承されていくこととなるからだ。考古学、民俗学ともに近世の地誌に、重要な関連情報が残されていることが多い。現

在はその典拠が示されることは当然であり、原典をたどることは容易である。しかしながら、これまでの学説を批判的に検討する際には、ごく当たり前のことではあるが論拠としている文献を確認する必要がある。しかし、そこに出典がない場合には、そのままやり過ごしてしまうこともあるのではなかろうか。しかしながら、本稿で実施した作業のように、典拠を特定し確認することは、その研究者の意図や思考を明らかにすることができる。この作業は多くの時間と手間を必要とするが、その実践によって誤った理解を修正することができるだろう。学説史研究ではこの作業は極めて重要である。それが考古学と民俗学の共通の根（ルーツ）を明らかにする営為ともなるだろう。

一定の地域内には、有形、無形を問わず、さまざまな文化遺産があり、相互に関連して存在している。近年、文化財の保存・活用が求められる時代となり、地域研究の中での考古学と民俗学、歴史学との連携が必要とされている。それらを総合する郷土史研究は、一つのモデルであるといえよう。

## 註

- (1) 「隠里の話」として『東京日日新聞』1918年2月20～23・25日、3月3・4・6・9～12・15・16日に全14回に掲載されたものである。本稿では、「隠里の話」の引用を、『一目小僧その他』（柳田1934b）からおこなう。なお、民俗学の学説史上での梶貸伝説については、川村清志の研究に詳しい（川村1997）。
- (2) 新旧古典近代文学の電子テキストをブログ「Blog 鬼火～日々の迷走」で公開している元高等学校教員・藪野直史は、柳田の「隠れ里」について、出典や地名の検証を試みている。本稿では当ブログを参照しつつ確認・検証をおこなった。なお、藪野は柳田が意図的に古墳と梶貸伝説との関係を遠ざけたと分析している。藪野直史「Blog 鬼火～日々の迷走」<http://yab.o.oo7.jp/>（2024年3月31日 最終閲覧）
- (3) 国立公文書館蔵の『行囊抄』写本による。「国立公文書館 デジタルアーカイブ」<https://www.digital.archives.go.jp/>（2024年3月31日 最終閲覧）

## 引用・参考文献

### 【日文】

- 秋田忠俊 1984「第十章 口頭伝承」愛媛県史編さん委員会（編）『愛媛県史民俗下』愛媛県、愛媛：pp. 571-764
- 飯田豊雲 1913「梶貸穴」『郷土研究』1巻3号 郷土研究社、東京：pp. 48-49
- 五十嵐力 1913『趣味の伝説』二松堂書店、東京
- 伊東尚一（編）1952『鳴鹿村誌』鳴鹿村、福井
- 井上翼章（編）（日置謙校訂）1903『越前国名蹟考第三編 大野郡・坂井郡』中村興文堂・品川書店、福井

- 上田三平（編） 1920『福井県史蹟勝地調査報告 第1冊 若狭及び越前に於ける古代遺跡』福井県内務部、福井
- 麻植郡教育会（編） 1922『麻植郡誌』麻植郡教育会、徳島
- 大村正之 1940「水戸田村、市ノ井大塚古墳及び同生源寺新十三塚古墳」『富山県史蹟名勝天然記念物調査報告』14輯 富山県、富山：pp. 3-10
- 岡村利平 1909「飛州志備考」『飛州志』住伊書店、岐阜：pp. 1-104
- 笠井新也 1910「阿波考古雜記」『考古学雑誌』1巻3号 日本考古学会、東京：pp. 46-52
- 笠井新也 1911『阿波伝説物語』済美會、徳島
- 笠井新也 1922「阿波国美馬郡段の塚穴」『人類学雑誌』37巻5号 東京人類学会、東京：pp. 132-136
- 鴨島町教育委員会 1964『鴨島町誌』鴨島町教育委員会、徳島
- 川村清志 1997「枕貸し伝説再考—近代における伝説の生成と受容—」『人文學報』80号 京都大学人文科学研究所、京都：pp. 109-143
- 北見俊夫 1954「日本人の異郷観念の一断面—枕貸伝説をめぐって—」『日本民俗学』1巻4号 日本民俗学会、東京：pp. 111-118
- 西園寺源透（編） 1927『松山史要』伊予史談会、愛媛
- 西園寺富水 1947「予州道前周桑郡北条八幡宮八月廿八日御頭文之事」『日本民俗学のために—柳田國男先生古稀記念文集—』6輯 民間伝承の会、東京：pp. 73-76
- 斎藤 忠 1992『日本考古学用語辞典』学生社、東京
- 佐野之憲（笠井藍水訳） 1932『阿波誌』芳川堂、徳島
- 柴登巳夫 1986「第一編 原始・古代 第二章 箕輪の遺跡と遺物」『箕輪町誌歴史篇』箕輪町誌編纂刊行委員会、長野：pp. 43-326
- 謝肇澗（岩城秀夫訳注） 1997『五雜俎』2 平凡社、東京
- 大門町教育委員会（編） 1981『大門町史』大門町、富山
- 田所眉東・天羽吞鯨（編） 1925『富岡町志』富岡町、徳島
- 出口 生 1914「土俗覚帳（二）」『人類学雑誌』29巻3号 東京人類学会、東京：pp. 110-117
- 鳥居龍藏 1917「東北亞細亞に於ける無言交易に就て」『人類学雑誌』32巻8号 東京人類学会、東京：pp. 1-21
- 長野県上伊那郡教育会（編） 1975『葦原拾葉 下巻』名著出版、東京
- 中谷文作・野田栄太郎（編） 1909『若越小誌』福井県、福井
- 長山源雄 1914「敷地神社」『郷土研究』2巻8号 郷土研究社、東京：pp. 57-58
- 長山源雄 1920「六地藏石燈籠に就て」『考古学雑誌』11巻3号 日本考古学会、東京：p. 50
- 長山源雄 1929「豊後国直入地方の民間伝承」『民俗学』1巻5号 民俗学会、東京：pp. 41-46
- 長山源雄 1934『南予史研究（稿本）』長山源雄、愛媛
- 長山乾城 1937「南予の伝説と土俗（一）」『伊予史談』92号 伊予史談会、愛媛：pp. 64-65
- 長山乾城 1938a「伊予の枕貸伝説」『伊予史談』97号 伊予史談会、愛媛：pp. 67-69
- 長山源雄 1938b『南宇和郡史』各種団体事務所、愛媛

- 西田 栄 1968「愛媛考古界のあゆみ」『伊予史談』189号・190号・191号合併号 伊予史談会、愛媛：pp. 21-27
- 西田 栄 1980「第二部 解説 第一章 概観 1 松山における考古学的研究のあゆみ」松山市史料集編集委員会（編）『松山市史料集第1巻』松山市役所、愛媛：pp. 505-510
- 西田 栄 1992「伊予史談会元老たちの考古学的関心―特に西園寺富水と長山乾城の業績を訪ねて―」『愛媛考古学』12号 愛媛考古学協会、愛媛：pp. 1-14
- 野口年長 1939『栗の落穂』阿波郷土研究会、徳島
- 野村純一 2000「わんかしでんせつ 梶貸伝説」『日本民俗大辞典』下 吉川弘文館、東京：pp. 842-843
- 丸山太一郎 1916「古墳の名称」『考古学雑誌』6巻5号 日本考古学会、東京：pp. 51-63
- 南方熊楠 1913「南方随筆（二の上）」『郷土研究』1巻5号 郷土研究社、東京：pp. 36-46
- 箕輪町郷土博物館編 2013『松島王墓を考える』箕輪町郷土博物館、長野
- 宮永正運 1951『越之下草』富山県郷土史会、富山
- 無記名 1979「『伊予奇談伝説』目次」『伊予の民俗』29号 伊予民俗の会、愛媛：pp. 18-48
- 橋本正春 2009『富山県考古学研究史事典』橋本正春、富山
- 森 正史 1961「伊予の伝説（一）―木・石・塚の伝説―」『愛媛国文研究』10号 愛媛国語国文学会、愛媛：pp. 99-112
- 森 正史 1963「柳田国男先生と伊予一先生の御逝去を悼んで―」『伊予路―民俗と歴史―』8号 愛媛県民俗会、愛媛：pp. 1-2
- 予水老漁 1930「梶貸伝説に就いて」『愛媛県周桑郡郷土研究彙報』3号 愛媛県立周桑高等女学校内郷土研究会、愛媛：pp. 101-102
- 渡部盛義 1930「梶貸伝説について」『愛媛県周桑郡郷土研究彙報』1号 愛媛県立周桑高等女学校内郷土研究会、愛媛：pp. 29-32
- 柳田国男 1910「伝説の系統及分類」『太陽』16巻16号 博文館、東京：pp. 169-173
- 柳田国男 1933a「年中行事調査標目（五）」『旅と伝説』68号 三元社、東京：pp. 87-105
- 柳田国男 1933b『桃太郎の誕生』三省堂、東京
- 柳田国男 1934a「梶貸穴」藤村作編『日本文学大辞典第3巻』新潮社、東京：p. 1247
- 柳田国男 1934b『一目小僧その他』小山書店、東京
- 柳田国男 1935a「風位考」国学院大学方言研究会編『風位考資料』国学院大学方言研究会、東京：pp. 141-209
- 柳田国男 1935b『郷土生活の研究法』刀江書院、東京
- 柳田国男・大間知篤三 1937『婚姻習俗語彙』民間伝承の会、東京
- 湯浅利彦 2022「1927（昭和2）年夏の鳥居龍蔵―四国の東と西で―」『鳥居龍蔵研究』5 鳥居龍蔵を語る会、徳島：pp. 193-200

## 【英文】

Keightley, Thomas. 1828 *The Fairy Mythology*. Vol. 1. & Vol. 2. London: William Harrison Ainsworth.